

## 健康な社会への疫学的アプローチの方法の解説と事例の体系的紹介

# 『社会格差と健康 —社会疫学からのアプローチ—』

評者 鏡森定信 富山大学医学部教授

本書は、健康に影響する社会的要因を追究することを旗幟鮮明にして集まった「社会疫学」の気鋭の研究者たちが、今後の保健・医療・福祉に係る政策に貢献するとその共通認識のもとに、著者間の連携を密にして分担執筆された、この分野での稀有の成書の労作である。

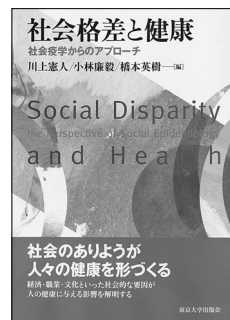
病因究明を目的とした伝統的疫学(病因疫学; etiologic epidemiology)の著書は多いが、本書では、その中でも主張されているように、経済、教育、労働状況などの社会的要因を扱い、健康な社会づくりの政策への貢献を主眼とする政策疫学(policy epidemiology)に軸が置かれている。

わが国でも、健康に係る社会的要因に主眼を置いた著作は少なからずはあるが、その社会的要因を階層的にアプローチする研究方法の解説、結果の解釈、そして実証的研究事例の紹介を本書のように体系的に行ったものは、これまでなかったと思われる。

社会的要因の階層的アプローチについては、これまでのこの分野の著作では、健康に係る社会的要因として、個人やコミュニティ・社会集団の範囲(本書によればミクロ水準と定義され、生活習慣、社会的ネットワーク、消費活動などがその要素)を中心としたものがほとんどであった。しかし、最近はこの範囲を超える研究も報告されてきている。例えば、個人の要因だけでは説明できない職位階層や生活圏など、所属する集団の社会文化的属性が健康に影響する事例として、ロンドン大学のMarmot教授らの、公務員を調査対象とした数々の追跡的研究によるものがある。仕事の要求度や裁量度といった個人の職域ストレスが、病欠や心筋梗塞の発生に影響するものの、これらの個別要因では説明できない影響が、職位階層という個人の上位概念である所属集団の特性によってもたらされることを明らかにしている。

本書では、このような各人の個別のミクロ的社会的要因が、各人が属している生活圏や職業(本書ではメゾ水準と称している)、あるいは、国やそれを越える規模の範囲である価値システム、精神的特徴、信条など(マクロ水準)からも影響を受けることから、ミクロ、メゾ、マクロの各社会的要因の水準の階層的アプローチの方法として、多重レベル分析がわかりやすく解説されている。

川上憲人・小林康毅・橋本英樹  
(編): 社会格差と健康—社会疫学からのアプローチ。3,400 円＋税。東京大学出版会



る。また、社会疫学から得られた結果の解釈についても誤謬例を示しながら詳細に説明されている。実証的研究事例の紹介では、社会経済的要因として、貧困、所得分布、医療へのアクセス、職業階層、文化・教育・社会関係に係る要因として、教育の不平等、ジェンダー、文化、社会関係を取り上げ、それぞれの健康に及ぼす影響が研究方法も含めて詳述されており、社会疫学の理解を具体的に深められるよう工夫されている。

さて、一通り社会疫学の方法と実際を理解したところで、最後の10章、「社会疫学と個人、社会、倫理」では、個人の人權を尊重しつつ、社会・公共の健康福祉増進に貢献する疫学研究における倫理的規範について、歴史的経緯を踏まえながら記載し、最後に政策疫学の現状とそれを発展させるための課題を読者とともに考察すべく提示している。

『社会格差と健康』という本書のタイトルから、所得、教育機会、福祉・医療サービスなどの格差拡大という今日の社会状況の健康への影響という、時代的関心事を中心に扱った著作と思われる向きもあるかもしれない。しかし、第1章の「社会疫学—その起こりと展望」で、社会疫学の定義、歴史、方法、研究領域、健康の社会政策への貢献について詳細な記述を行い、社会疫学に関する正確な基本的理解を担保した上で、以降の章では、前述したように社会疫学の内容で体系的に構成されている。

以上の理由から、本書を政策疫学を実践的に理解するための成書の著作として推薦したい。今後、わが国での優れた実証的研究の紹介スペースが多くなることを期待したい。また、政策疫学のいっそうの発展のため、健康情報の収集に個人情報保護の除外適応を受けることで満足せず、例えば、ヨーロッパのいくつかの国や地方では行われているように、個人情報を匿名化しつつ、社会的要因の健康への長期的あるいは包括的検討を目指して、ライフコース研究のための追跡調査や振り返り調査ができる、公による情報システムの開設にも著者らに専心をお願いしたい。